

第158回 埋蔵文化財セミナー

主催：京都府教育委員会・(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都の古墳時代

全長 201m !

日本海側最大の
前方後円墳

網野銚子山古墳
(京丹後市)

講演

大手前大学教授
森下章司氏

古墳時代の導水施設

水を使った祭祀の跡！

千代川遺跡
(亀岡市)

入場
無料

申込
不要

先着 80 名

ふるさとミュージアム山城
(京都府立山城郷土資料館)

2025 7.27 日

13:30 - 16:30

第158回埋蔵文化財セミナー

京都の古墳時代

日 程

13時30分 開会あいさつ

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

常務理事・事務局長 村山和久

日程説明(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査課参事企画調整係長事務取扱 筒井崇史

13時40分 報 告 1

「京丹後市網野銚子山古墳の調査と公園整備」

京丹後市教育委員会文化財保存活用課

埋蔵文化財係長 岡林峰夫氏

14時25分 報 告 2

「亀岡市千代川遺跡・拝田14号墳の調査」

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査課調査第3係長 山本 梓

15時10分 休 憩

15時20分 講 演

「最新の古墳時代像と京都の古墳時代遺跡」

大手前大学国際日本学部教授 森下章司氏

16時30分 閉 会

主 催 京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

会 場 ふるさとミュージアム山城

京丹後市網野銚子山古墳の調査と公園整備

京丹後市教育委員会文化財保存活用課 岡林 峰夫

1. はじめに

網野銚子山古墳は、京都府北部の丹後半島の北部、日本海を望む台地の縁辺部に位置する、墳丘長 201 m と推定される日本海側最大の大型前方後円墳です。本古墳が築造された古墳時代前期後半には京都府北部の丹後地方に有力な政治勢力があったという、いわゆる「丹後王国論」を象徴する遺跡の一つとされています。

大型で古墳の形がよく残っていることから、周辺に立地する 2 基の古墳（第一古墳、第二古墳）とともに古く大正 11 年 3 月 8 日に国の史跡に指定されています。（指定名称：銚子山古墳）その後、平成 23 年 9 月 21 日に周溝部分が追加指定され、現在の指定面積は 37,743㎡に及びます。

2. 網野銚子山古墳の調査

網野銚子山古墳は墳丘裾が後世に削平を受けており、本来の姿や遺構の残り具合など不明な点があり、これらの確認が課題とされていました。そのため、平成27年度から令和2年度まで、整備計画等に必要となる基礎資料を得る目的で発掘調査を実施しました。今回は、その中での特に大きな成果を上げた H30-1 トレンチ (tr) と H30-2 トレンチの成果を中心に紹介します。

H30-1 tr の成果 後円部端の墳丘主軸線沿いに、墳頂部縁辺から墳裾までの状況を一連で確認するために設定したトレンチです。

墳丘斜面は全体的に葺石が良好に残存し、上段斜面では基底石も検出されました。中段斜面は基底石が残っていなかったものの、墳丘盛土の傾斜変換点を確認しました。各斜面の傾斜角は基本的には上段26°、中段25°、下段22°を測りますが、いずれの斜面も最上部付近では傾斜を緩くしています。

段築テラスには埴輪列と磔敷が良好に残っていました。テラス幅は、1 段目が残存幅 3.9m、2 段目が幅 2.8m を測ります。また、1 段目は標高約 24.0m であり、後円部 1 段目テラスは南東（内陸）から北西（海）へ 1 m 程度傾斜しているとみられます。そして、今回初めて後円部 2 段目テラスの標高（約 28.2m）をおさえられました。

墳頂部の調査では、上段斜面肩に隣接して埴輪列を確認しました。周辺は後世の削平を受けていますが、部分的に礫が残存しており、本来は礫敷があったと考えられます。墳頂部縁辺には以前より、土手状の高まりが確認されていましたが、ここに埴輪片や礫が多く含まれていることがわかり、削平の際の土が盛られた可能性があります。

H30－2 tr の成果 墳丘東側のくびれ部に位置し、2段目テラスから墳裾の状況を一連で確認するために設定したトレンチです。

上・中・下段斜面においては、一部抜け落ちているものの葺石を確認しました。特に、上・中・下段斜面の裾に置かれた基底石はいずれも大きく屈曲しており、これにより「くびれ」の位置が確定できました。なお、くびれの位置は、調査前の地形よりもかなり奥まった位置で見つかっています。

2つの段築テラス面(1段目テラス面・2段目テラス面)で、埴輪列と礫敷を確認できました。特に2段目テラス面の残りが良好で、基底石に沿って屈曲して並べられていました。

2段目テラス面のくびれ部から前方部に向かって、葺石、埴輪列、礫敷が検出され、テラス面が前方部に向かって下がる、いわゆるスロープ状になっている構造であることが判明しました。

3. 網野銚子山古墳の整備

京丹後市教育委員会では「網野銚子山古墳整備基本計画」に基づき、平成30年度から令和7年度まで網野銚子山古墳の史跡整備を行いました。墳丘そのものは、前方部については改変が進んでいるものの全体的に墳丘の残存状況は良好といえる状態であったことから、整備にあたっては現在の形状を最大限生かし、墳丘の復元は最低限とする方針としました。

墳丘の復元は前方部の損傷部を中心に行いました。発掘調査の成果をもとに、墳丘裾ラインを復元。段築1段目テラスまで盛土を行いました。盛土を行ったところは排水シートを埋め込むと共に、元々自生する植物が根付くよう、表面には種子なしの植生シートを敷きました。そして、墳丘の形がわかる程度を目標に樹木伐採を行いました。伐採は、過度の伐採により植生を変えてしまわないよう、毎年施工場所を検討し少しずつ実施しました。また、往時の姿をイメージできるよう、くびれ部の一部において埴輪列、葺石を復元しました。葺石は発掘調査において出土した葺石を再利用し、埴輪列は3D スキャナーにより計測したデータをもとに型取りを行い、ハケメや黒斑も再現したものです。

周溝部分は、周溝の場所がわかるよう土舗装を行い周溝の平面表示を行い、イベント、普段の遊び場として多目的に利用できるよう整備しました。

来場者用の駐車場及びガイダンス施設も新設しています。ガイダンス施設(建築面積74㎡)は木造平屋建てで、網野銚子山古墳のすがた、墳丘のかたち、発掘調査で分かったことなどを解説し、網野銚子山古墳に関心を持たれた方が詳しく古墳のことを知ることのできる施設となっています。

今後は、観光・社会科学習・コミュニティの場など、さまざまな利用がなされるよう、積極的な取り組みを行いたいと考えています。



整備後の網野銚子山古墳



復元した葺石と埴輪列

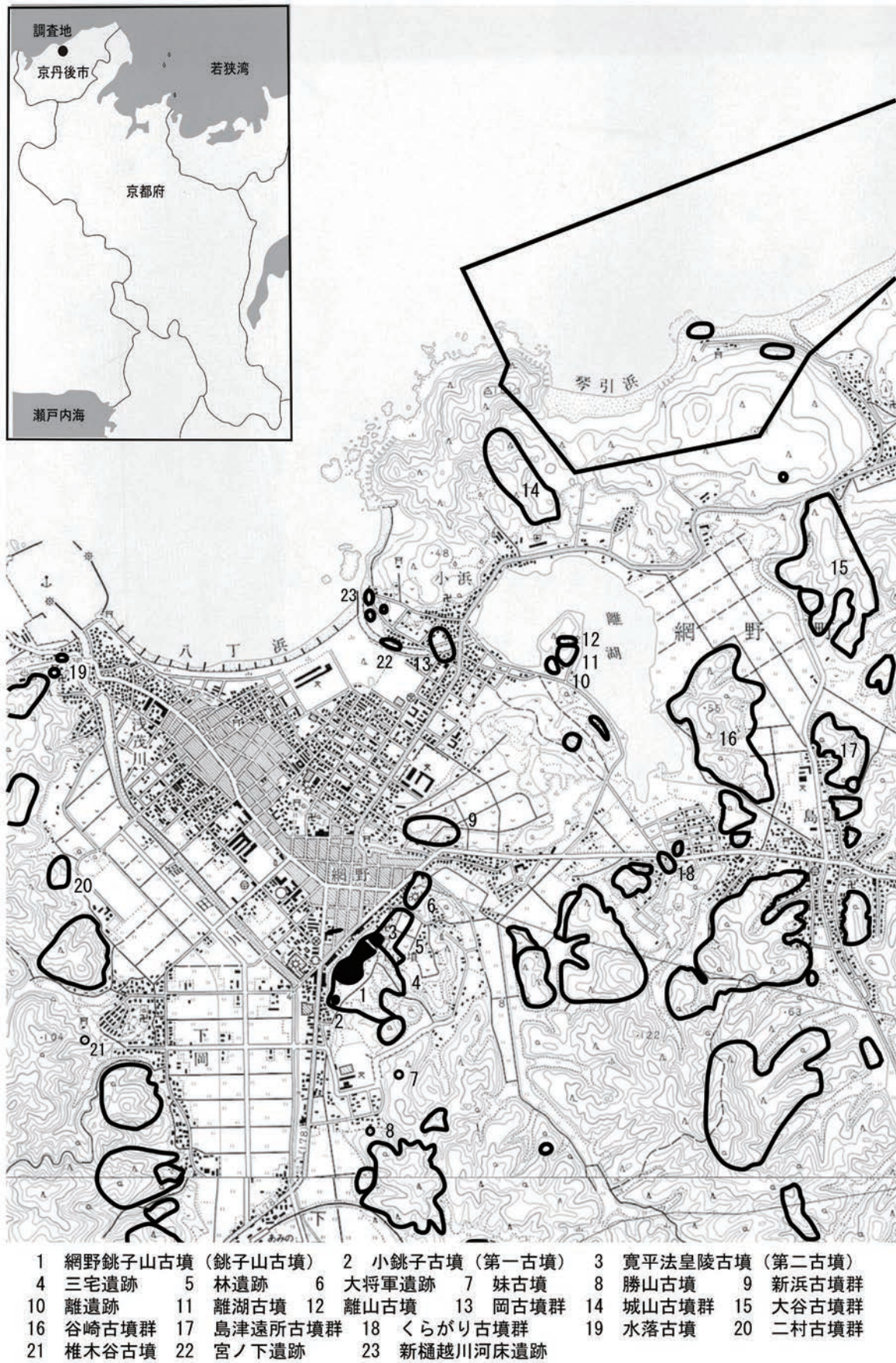


図1 周辺遺跡分布図

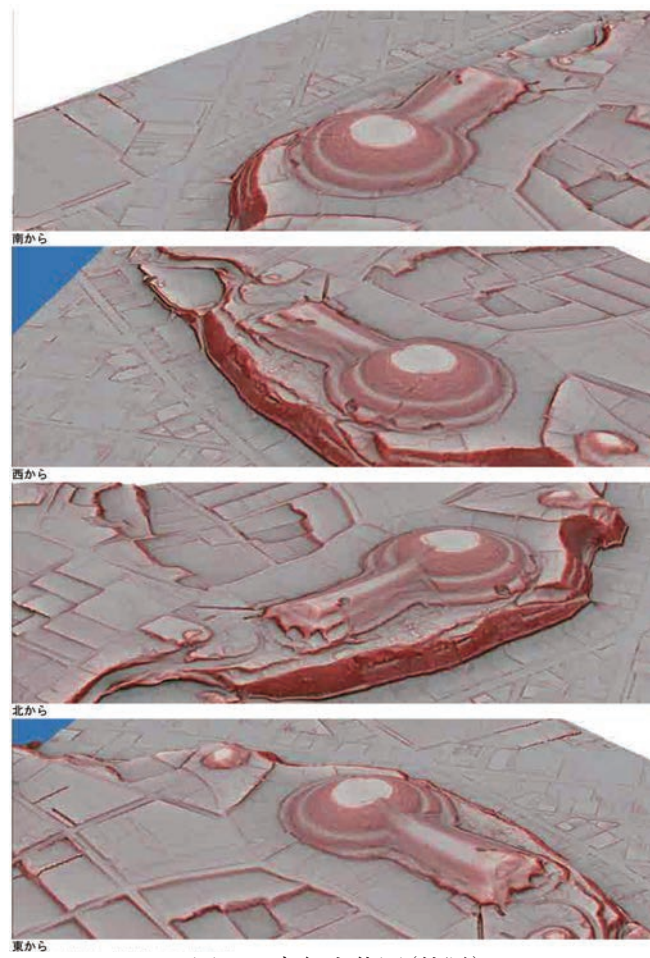


図2 赤色立体図(俯瞰)



図3 赤色立体図 平面

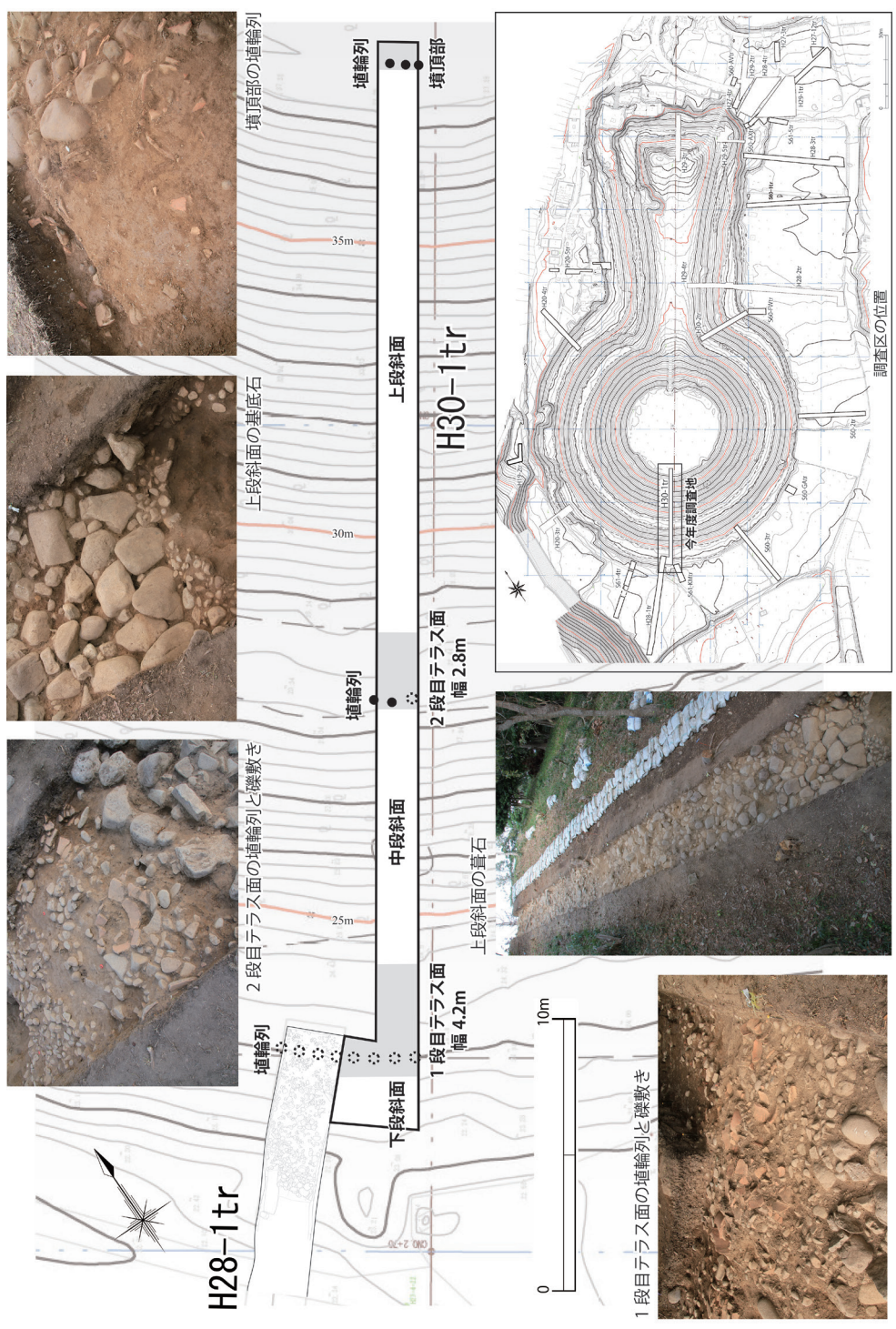
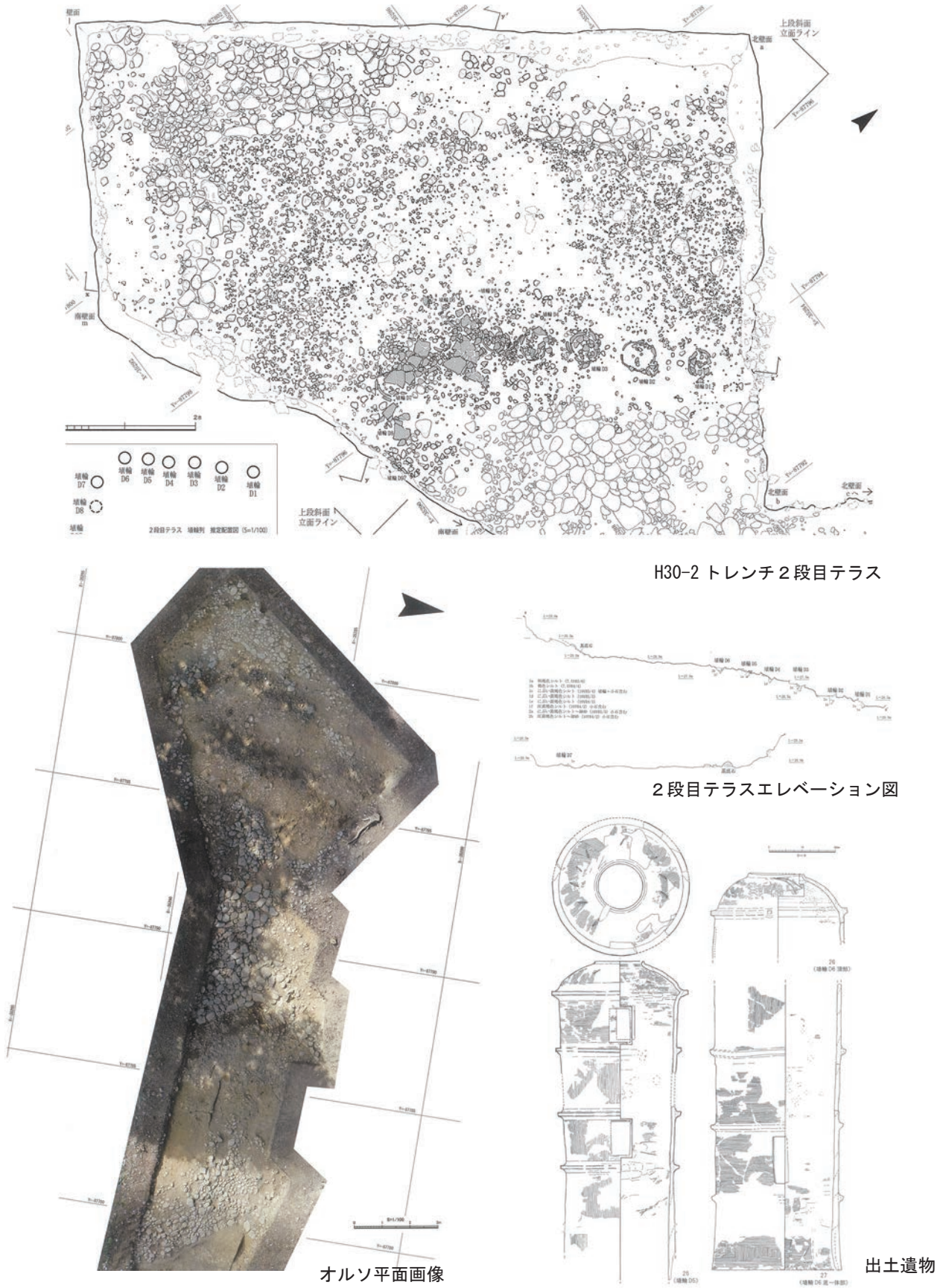


図 4 後円部の調査 (H30-1 トレンチ)



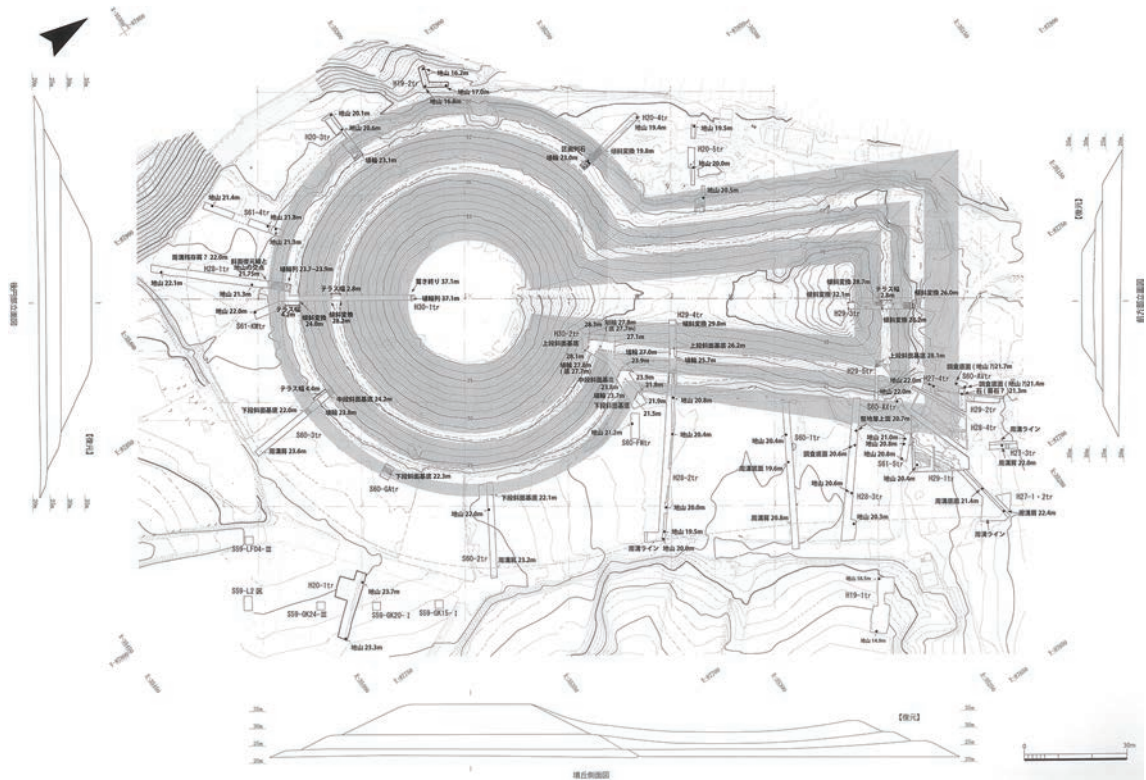


図7 墳丘復元図

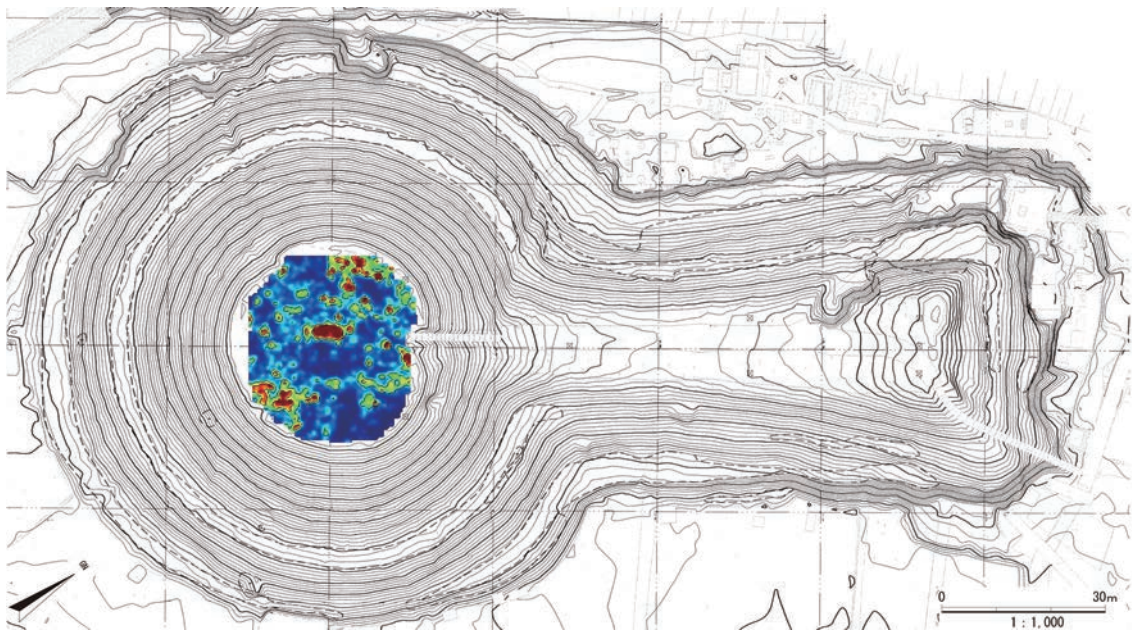


図8 後円部地中探査結果図

メモ

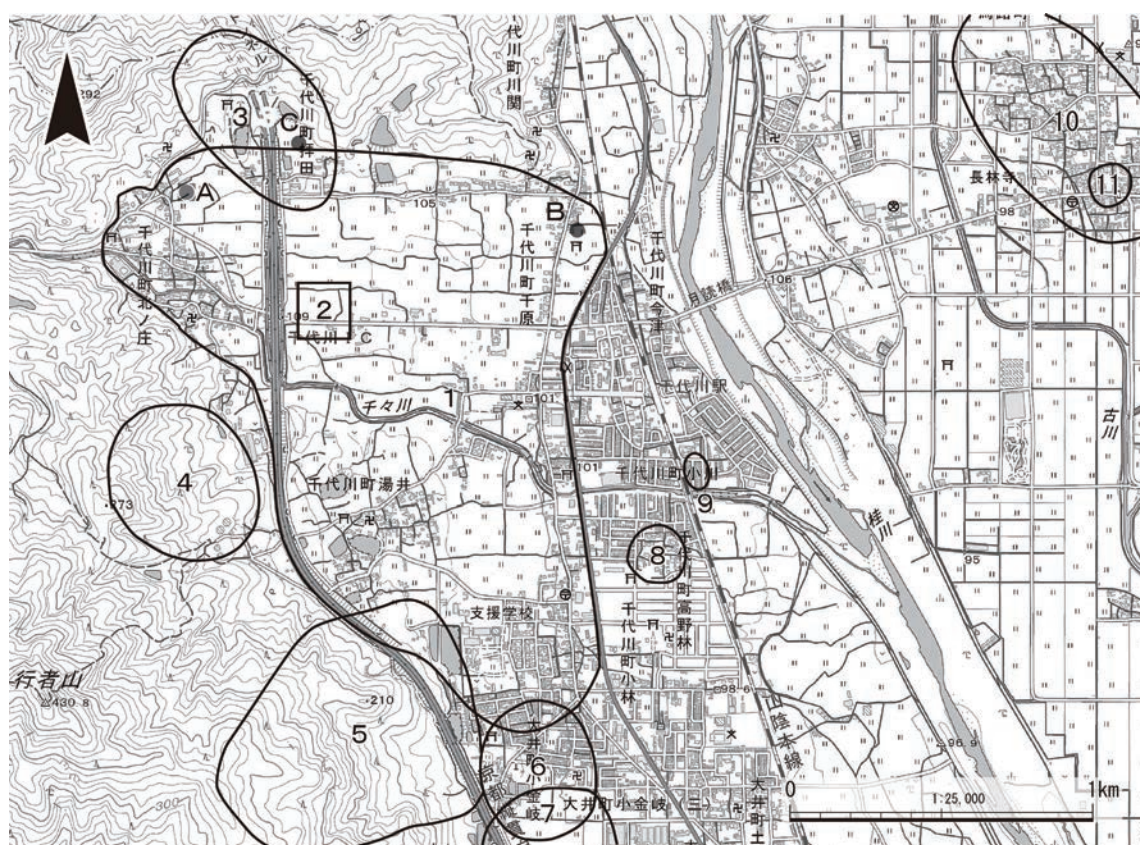
ちよかわ はいだ 亀岡市千代川遺跡・拝田 14 号墳の調査

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 山本 梓

1. はじめに

亀岡市は、京都府のほぼ中央部に位置し、北は南丹市、東は京都市、南は大阪府高槻市・茨木市、西は大阪府豊能郡に接しています。市域の中央部に亀岡盆地が広がり、盆地のやや東寄りをおおいがわを大堰川が流れています(図1)。

今回報告する千代川遺跡と拝田14号墳の立地する千代川町は、亀岡市の北部に位置しており、西側・北側を山に囲まれています。町域の東側には大堰川が流れているため、扇状地が広がり、その多くが段丘化しています。



1. 千代川遺跡 2. 桑寺廃寺 3. 拝田古墳群 4. 北ノ庄古墳群 5. 小金岐古墳群 6. 馬場ヶ先遺跡
7. 北金岐遺跡 8. 高野林城跡 9. 小川城跡 10. 馬路遺跡 11. 馬路館跡
A. A5区 B. 千代川遺跡P地区 C. 拝田14号墳

図1 調査地と千代川町周辺遺跡

2. 千代川遺跡について

(1) これまでの調査

千代川遺跡は、令和6年度末までに37次にわたる発掘調査が行われてきています。これまでの調査で、千代川町のほぼ全域を占める広大な遺跡で、縄文時代から中世に至るまでの遺構や遺物が分布する複合遺跡であることがわかりました。その中でも、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落と流路、古代の掘立柱建物の存在がよく知られています。また、千代川遺跡の中心部やや北東よりに位置する桑寺廃寺^{くにしゅう}周辺は、「国主ヶ森」「学堂」などの小字名が残り、古くから丹波国府の推定地とされています。

ここでは、令和6年度に実施した調査のうち、特に重要なことがわかった2つの調査区について、調査の概要をお話しします。

(2) A5区の調査(図2、写真1～3)

千代川遺跡の北西隅に位置するA5区(図1 A地点)は、調査区の南西側と北東側にそれぞれ微高地があり、掘立柱建物、柱穴、土坑、耕作溝を検出しました。調査区の中央部分で、幅約20mにわたる流路を検出しました。微高地で検出した遺構はいずれも古代から中世の遺構です。

調査区北西部分で検出した流路の肩部周辺を掘削中に、木樋1を検出しました。近くから、滑石製の管玉と土師器高杯が各1点出土したにすぎず、時期を明らかにすることはで

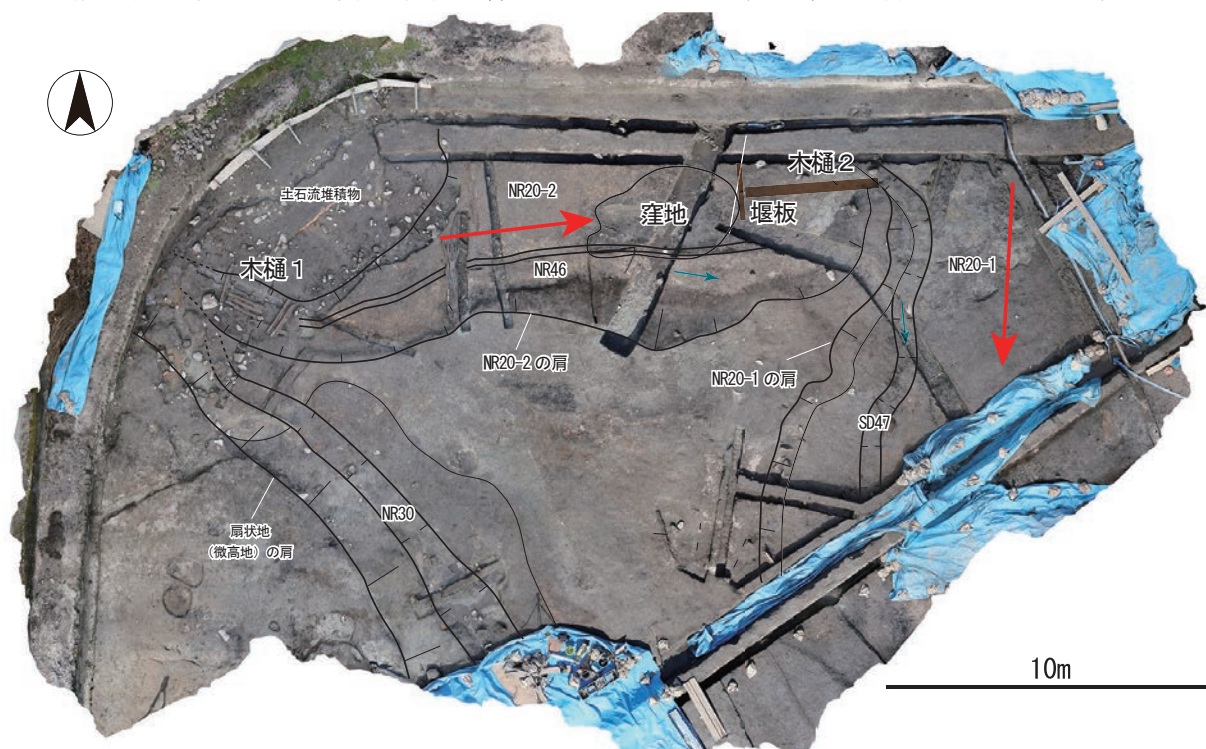


図2 遺構配置図

きませんでした。高杯や、木樋の埋没後に堆積した土層からの出土遺物の年代などを整理すると、古墳時代前期末から中期初頭頃に設置されたものである可能性が高いです。

木樋1周辺を慎重に検出しながら、流路部分の堆積状況の確認のために断面の検討を重ねたところ、流路部分に複数の溝があり、機能と埋没を繰り返していたことが判明しました。それに加えて、木樋1から15mほど東側に木樋2を検出しました。木樋2には槽^{そう}が2つ造り付けられていました。木樋2は堰板^{せきいた}もセットで検出しており、上流からの水を堰板の西側の窪地で貯め、堰板の上部に設けられたV字形の切り込みから浄水を木樋2に流し



写真1 木樋1(手前)と木樋2(奥)の検出状況(西から)



写真2 木樋1(北西から)



写真3 木樋2と堰板(北西から)

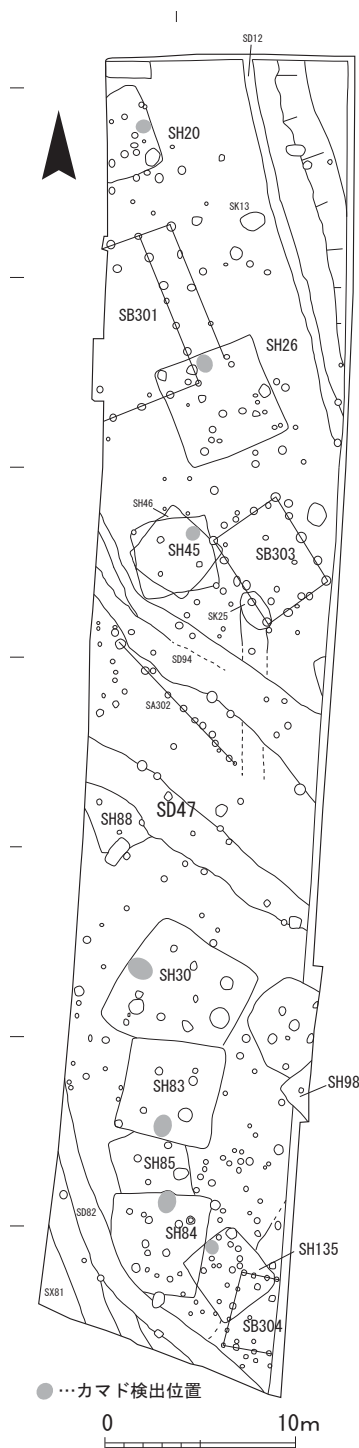


図3 P1区平面図（500分の1）

入れる構造となっていました。また、木樋②の南側では
ふながた
舟形木製品も出土しており、この場所で水の祭祀が行われていたことが明らかになりました。

（3）P1区の調査（図3、写真4・5）

遺跡の北東隅に位置するP1区（図1B地点）は、弥生時代中期後葉以降、人々の生活痕跡は確認できるものの、弥生時代後期にも依然として安定的に住居が営まれることはありませんでした。しかし、古墳時代後期になると、竪穴建物が何回も築かれるようになり、同時期に北西から南東方向へ斜行する溝が掘削されはじめます。この時期に住居として建てられたと考えられる竪穴建物は計11基であり、南側で検出した5基は一部が重なっていました。竪穴建物からの出土遺物に型式による時期差が顕著でないことから、短期間で建て替えを行いながら、継続的に居住していたと考えられます。

また、屋内炉に代わって出現した造り付けの竈^{かまど}をもつ建物が7基あり、竈体部に焼土、炭化物が混入しているものもあり、建て替えの際には、カマドの土を再利用していた様子が見られます。

3. 拝田古墳群について

（1）これまでの調査（図4）

千代川遺跡の北に位置する拝田古墳群は、横穴式石室の奥壁部分に石棚を持つ拝田16号墳（全長約35mの前方後円墳）を中心とする、古墳時代後期に造られた古墳群であると考えられてきました。

昭和52年度には、拝田10号墳の調査が行われています。10号墳は、当時の地形測量などから、南北22m・東西25mのやや楕円形を呈した円墳であったと推定されています。墳丘は丘陵の自然地形を利用し、一部削平して成形・築造したとされています。墳丘には、埴輪^{はにわ}や葺石^{ふきいし}などの外表施設は確認されませんでした。



写真4 竪穴建物群検出状況(南から)



写真5 竪穴建物 S H30竈周辺土器出土状況(東から)



図4 拝田古墳群分布図(京都府教育委員会1980 一部改変)

10号墳の埋葬施設は、南北に安置された木棺であり、一部盗掘されている以外は遺存状態が良好なようです。墳頂部から墓壙が掘り込まれ、木棺は二段墓壙の中央に埋葬されていました。割竹形木棺を使用したものと推定されています。副葬品は、棺内から内行花文鏡1面、鹿角装鉄剣1点、鉄刀1点、鹿角装刀子2点、刀子1点、鉄釘3点、玉類が、棺外から鉄剣1点、鉄鏃数十点が出土しています。5世紀後半から6世紀初め頃と推定されます。

昭和53年度には、拝田8・9号墳の調査が行われています。8号墳は、墳丘の大部分が削平されており、墳丘の一部に残存していた列石と敷石状遺構および一部のトレンチで確認された裾部の位置などから、南北11m・東西12mのやや不整形な円墳であると推定され

ています。

8号墳の埋葬施設は西側に開口する両袖式の横穴式石室であり、^{げんしつ}玄室床面には前面に敷石があったようです。出土遺物は、^{せんどう}羨道部から須恵器、鉄鏃が各1点、玄室から須恵器7点、鉄鏃5点が出土しています。6世紀末頃と推定されます。

9号墳は、墳丘が山道で半分削平されていたようですが、残存状態から、約8mの円墳であると推定されています。埋葬施設は西側に開口する横穴式石室であり、玄室内に^{せきしょう}石障（玄室内部の壁面に接し立て巡らせた板石。棺の役割をするもので、九州地方、特に熊本でよく見られる）が残存していました。出土遺物は、石障内から須恵器5点、鉄鏃2点、石障外の玄室内から須恵器14点、鉄鏃30点が出土しています。6世紀前半から中頃と推定されます。

（2）拝田14号墳第2次調査（図5、写真6～13）

拝田14号墳は、亀岡市千代川町拝田の丘陵南東側斜面およびその東側の平坦地に位置する拝田古墳群（全18基）のうちの1基です。

令和3年度に京都府教育委員会文化財保護課により、5か所にトレンチを設けた小規模調査（第1次調査）が行われましたが、その際には古墳の墳形および墳丘規模についての明確な成果を得られませんでした。そのため、この2点について明らかにするために令和5年度に第2次調査を実施しました。

拝田14号墳の墳丘西半は、後世の削平がかなり進んでおり、墳丘の盛り土および外表施設の残存があまり期待できないことから、第1次調査の1～5トレンチの再掘削および部分拡張をするとともに、あらたに墳丘東半を中心に6～11トレンチを設け、すべて人力掘削で調査を行いました。

1トレンチでは、墳丘中ほどと墳丘裾の2か所で、それぞれ約0.5m幅の範囲に帯状に並べられた葺石を確認しました。また、トレンチ北端付近で溝状の落ち込みを確認し、堆積^{しゅうこう}状況や落ち込みの位置から考えると、周溝の肩である可能性が高いと言えます。

2・8・10トレンチは、調査当初それぞれ独立したトレンチを設定していましたが、8・10トレンチにおいて周溝を確認したことから、墳頂部から周溝までの古墳造成の様相を検討するために、3つのトレンチをつなげて調査を進めました。墳頂部では墓壙および木棺痕跡を確認し、木棺痕跡の内部では朱を検出しました。周溝の内側では平坦面および埴輪の抜き取り痕を確認しました。なお、周溝内からは、多数の埴輪片が出土しました。

5トレンチでは、トレンチ南東端付近で平坦面および埴輪の抜き取り痕、葺石および周溝の肩を検出し、周溝内から多数の埴輪片が出土しました。

7・9トレンチでは、墳丘、外表施設の確認には至らなかったものの、トレンチ断面の

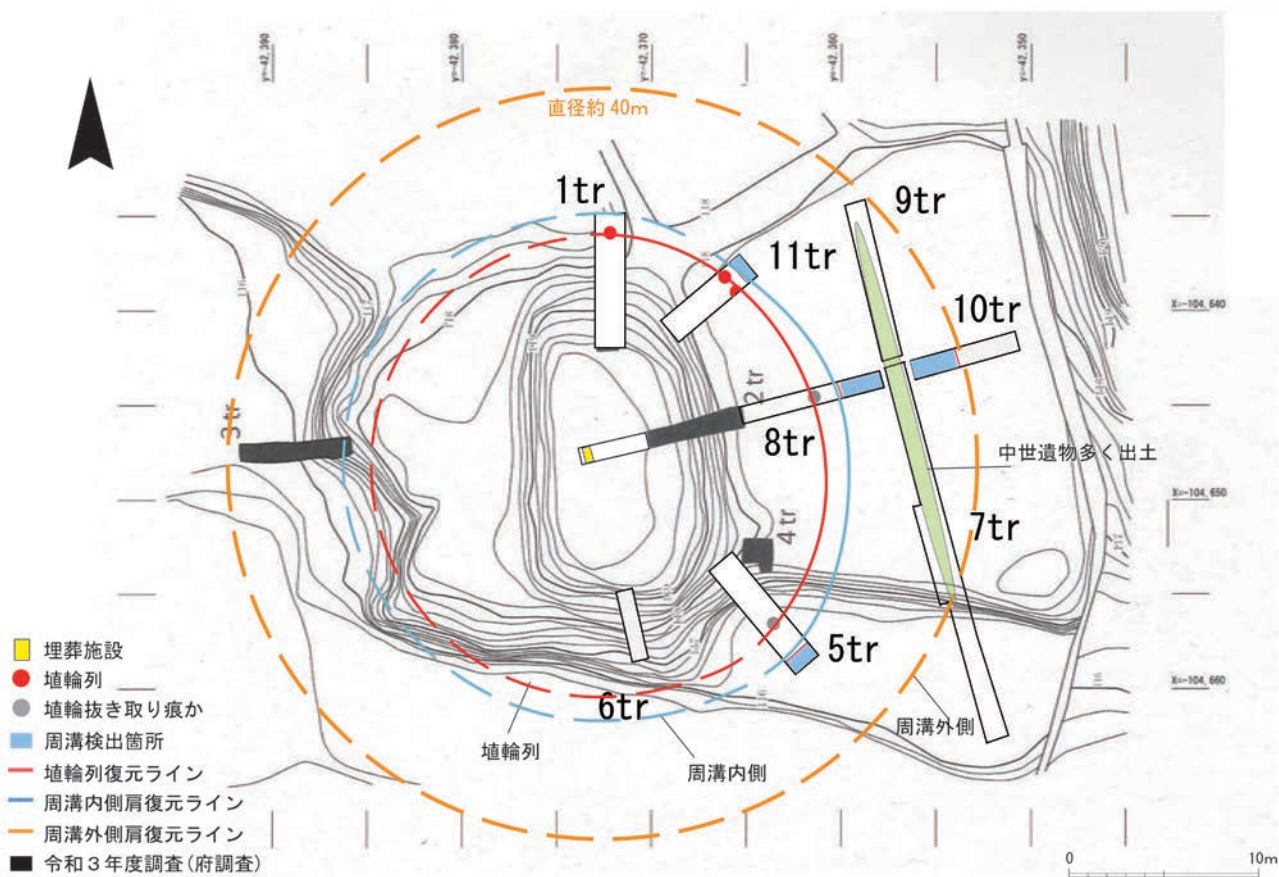


図5 拝田14号墳トレンチ配置図.

検討から、中世以降に整地を行っていることが判明しました。7トレンチ中央部において、埴輪片が集中して出土しましたが、おそらく周溝の一部が整地により部分攪乱^{かくらん}を受けていたと考えられます。

11トレンチでは、埴輪列および周溝の肩を確認しました。埴輪列は、周溝の肩の内側に形成された平坦面で確認しました。埴輪は一本ずつ穴を掘って据え付けられており、基底部を埋めて10cm大の礫を周囲に並べて補強した様子が見て取れました。また、平坦面全体に5cm大の礫を用いた礫敷が施されていました。周溝内から多数の埴輪片が出土しました。

3・4・6トレンチは、後世の削平および農地改変の際の石垣造成による攪乱を受けており、墳丘、外表施設の確認には至りませんでした。

今回の調査では、埋葬施設、外表施設(葺石・埴輪列・周溝)を確認し、埋葬施設は土層断面の検討から、二段墓壇を掘りこみ、割竹形木棺を設置したものと推定されます。

周溝は一部後世の攪乱を受けていましたが、およそ6m幅で、墳丘裾にあたる周溝の内側肩部には、築造当初葺石が並べられていたと考えられます。周溝の外側肩までを墳丘に含めると、



写真6 拝田14号墳全景(北西から)



写真7 拝田14号墳垂直写真(上が北)



写真8 1トレンチ(北から)



写真9 1トレンチ葺石検出状況(南東から)



写真10 5トレンチ(南東から)



写真11 11トレンチ埴輪検出状況(北東から)



写真12 8・10トレンチ周溝検出壁断面(南から)



写真13 埋葬施設検出状況

直径約40mを測る円墳となります。

円筒埴輪の外周調整および突帯の形状に見られる特徴は、古墳時代中期に入ってから見られるものです。また、11トレンチで確認した、唯一原位置を留めていた円筒埴輪は、基底が高く、20cm程度あり、古墳時代前期末頃の時期的特徴を示します。これらのことから、この古墳が前期末から中期初頭に築かれたと考えられます。

今回の拝田14号墳の調査で、これまで古墳時代後期を中心に形成されたと考えられてきた拝

田古墳群の中に、およそ100年前にさかのぼる古墳の存在が明らかになりました。また、亀岡盆地における古墳時代前期末から中期中葉に相当する古墳がさほど多くなく、特に千代川周辺ではほぼ知られていないため、拝田14号墳が、当該時期における首長墳であると考えられます。

4. まとめ

今回、令和5年度の拝田14号墳第2次調査、令和6年度の千代川遺跡第37次調査のA5区およびP1区の調査について、それぞれの成果をお話ししました。

千代川遺跡については、これまでの調査で複数の時代の遺構を確認してきており、集落が広範囲に分布している状況は知られていましたが、昨年度の調査において、古墳時代前期末から中期前葉頃に、自然地形と湧水点を利用した水の祭祀を行っていたことや、古墳時代後期に継続的に住居が営まれたことがわかり、大きな成果となりました。

拝田14号墳については、拝田古墳群の造られた年代がこれまで古墳時代後期と考えられていましたが、出土した円筒埴輪の様相から、少なくとも14号墳については古墳時代前期末から中期初頭頃の築造であることがわかりました。墳形および墳丘規模も、一部調査区での周溝の確認により、周溝を含めると直径約40mの円墳であることが判明し、葺石・埴輪も持つことも含め、この地域の首長墳であると考えられます。

千代川遺跡A5区で検出した木樋は、検出箇所の土壌分析や点数は少ないながらも近くで出土した土器の年代などを合わせて考えると、拝田14号墳の年代に近く、水の祭祀の行為主体者が、拝田14号墳の被葬者である可能性も十分にあります。また、P1区 of 古墳時代後期の竪穴建物群は、拝田古墳群で調査が行われてきた9・10号墳や、前方後円墳である16号墳と同時期に展開しており、周辺集落の形成過程と拝田古墳群を中心とした造墓活動についての関係を明らかにすることを今後の課題とします。

<参考文献>

京都府教育委員会1978～1980『埋蔵文化財発掘調査概報』

亀岡市2000『新修亀岡市史 資料編第一巻』

メモ

最新の古墳時代像と京都の古墳時代遺跡

大手前大学国際日本学部 森下章司

1. 古墳の調査と研究

3世紀中ごろから6世紀終わりの約350年に及ぶ古墳時代、九州南部から東北地域に及ぶ広い地域で大小さまざまな古墳が造られました。この時代の墳墓の中心をなすのが前方後円墳であるため、「前方後円墳の時代」と呼ぶこともできます。前期(3世紀中ごろ～4世紀後葉)、中期(4世紀末～5世紀)、後期(6世紀)の3つの時期に区分するのが通例です。

古墳の調査では、まず当時の古墳の姿をできる限り知る必要があります。今みるような樹木で覆われた状況は、本来の古墳の姿ではありません。測量調査や発掘調査を通じて、当時の古墳の形や構造、規模などを正確に把握します。大きな古墳となると全部を発掘することはむずかしく、また保存が優先するという観点から、トレンチ調査といって細長い調査区で古墳の裾の位置や各部の特徴をとらえます。遺跡は保護することが重要ですから、すべてを発掘すればよいというものでもありません。

大型前方後円墳は墳丘に平坦面と斜面が設けられており、^{だんちく}段築を構成します(図1)。斜



図1 古墳の復元 兵庫県行者塚古墳復元模型(加古川市総合文化センター)

面は葺石^{ふきいし}で覆われ、平坦面には埴輪列がありました。埋葬施設は主として後円部に設けられ、竪穴式石室、横穴式石室など各種の形式がみられます。棺に納められた遺骸の周りには副葬品として、当時もっとも貴重視された品物が納められました。

発掘調査などによって古墳の情報が得られると、まず考える必要があるのが、古墳が造られた年代です。これまでの研究成果（墳丘形態、埴輪や土器・須恵器、埋葬施設や副葬品の編年）によって、古墳の年代は細かくとらえられています。年代がわかると、各地における古墳の推移も把握できるようになります。

2 古墳築造の背景

古墳はなんのために造られたのでしょうか。多大な労力をかけて大きな墳丘を造ることには、遺骸を納める墓以上の意味があったはずです。

まず思い浮かぶのは「権威の象徴」でしょう。権力者が大きな建造物や墳墓で自分の権勢を誇示し、後世まで伝えようとした跡は世界中で認められます。

一方、研究が進むと、各種の古墳には一定の「秩序」のあることが分かってきました。墳形は前方後円墳が中心となること、古墳の規模によってランクが分かれること、埴輪や埋葬施設、副葬品の大枠が共通し、副葬された品物の質や数にもランクがみとめられることなど、「決まりごと」がみえます。秩序の頂点には「大王墓」と呼ばれる大和・河内・和泉・摂津の地に造られた大型前方後円墳があります。大王墓が規範となって古墳や埴輪の形・作り方、副葬品の種類などが各地に影響を与えていった状況も判明してきました。鏡など副葬品の多くも、大王を中心とする王権から配布されたものであることが確認されています。もちろん地域の独自性もさまざまな面に認められますが、古墳に関係することでは王権からの影響力が大きいものと評価されます。そもそも、これだけ広い地域に前方後円墳という特異な形態の古墳が共有され、それに価値を認めたということ自体が、共通する秩序の存在を如実に示すものです。

こうした古墳の形や規模にみる秩序は、被葬者の地位や出自^{しゅつじ}を示すもので、その背後には大王を中心とする政治体制があったと考えられるようになりました(図2)。その仕組みには時期による変遷も認められ、古墳が最大規模となる中期には、ひとつの古墳群において大型前方後円墳を頂点とする「階層構成型」の形成も認められます(図3・4)。

こうした墳形や規模に着目し、古墳の年代によって整理をすると、各地における古墳の消長やあるいは「栄枯盛衰」もみえてきます。丘陵上など特定の場所に、続けて前方後円墳など一定以上規模の古墳(首長墓墳)が築かれたものを「首長墓系譜」と呼んでいます。残念ながら代々の各古墳の被葬者が具体的にどのような関係であったのか(血縁による地

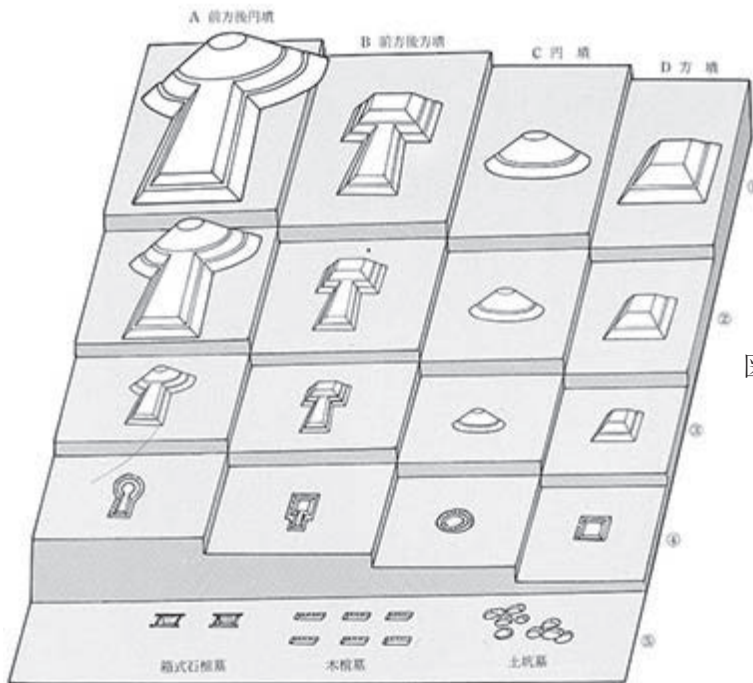


図2 古墳の秩序 都出比呂志編1989

『古墳時代の王と民衆』講談社

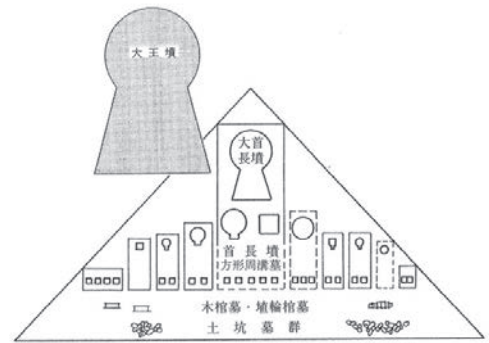


図21 南山城地域における中期の墳墓の階層構成
(長方形の枠は墓域を示す)

図3 中期古墳の階層構成 和田晴吾2018

古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館

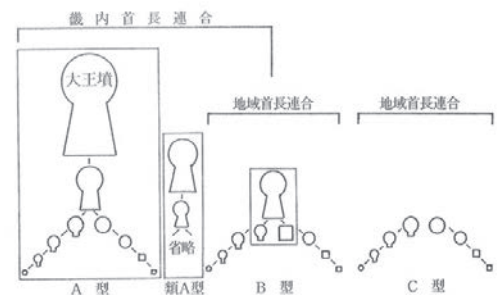


図22 中期古墳の階層構成の諸類型 (長方形の枠は墓域を示す)

図4 中期古墳の階層構成の類型 同上

位の継承など)、よくわかりません。おそらくは血縁など何らかの関係がある者が地位を継承していったことを示すのでしょう。今まで、めだった古墳がない地に大型古墳が「出現」したり、首長墓系譜が「断絶」したりするのは、地域社会の変動を示すものと考えられます。それも単に地域勢力の興亡というだけではなく、古墳の築造に影響力をもっていた王権とのつながりの変化も反映しているのでしょう。当時の人びとは、古墳の大きさや内容という目に見えるものを通じて、王権と地域との政治的関係を実感したのかもしれない。

大王墓の系譜や地域における首長墓系譜は、時期による変動が大きいことも特徴です。長期にわたって1箇所首長墓が築かれ続けてゆく例は限られています。中国や朝鮮半島の墳墓との大きなちがいと私は考えます。一般に古墳時代の政治権力は確立したものではなく、変動も大きかったものと考えられています。後期にだんだんと体制が整えられてゆき、7世紀に一定の国家支配の仕組みが整備され始めたとき、前方後円墳という仕組みも不要になったとみることができるでしょう。

3. 古墳と交通路・地域開発

以上のような古墳自体に着目する研究に加えて、近年とくに進展しているのは、古墳が位置する地域を自然環境や立地、基盤となった集落の動きなどに関連付けて、より総合的に把握する視点です。

首長墓は陸・海・川などの交通の要衝、津に面した地、平野を見渡せる位置など、立地を強く意識して築かれています。陸路や水路を行きかう人や船、集落や田畑などから見上げると、そこに古墳の高まりが見える。あるいは古墳の頂部からは、そうした重要地が見渡すことができるという特徴がみえます。時に並外れて大きな墳丘を築くことや、葺石や埴輪などで墳丘の外面を飾るといった日本の古墳の特色は、こうした交通路や各所からみた時の外観を強く意識したことのあらわれです。

兵庫県最大の前方後円墳である神戸市五色塚古墳(194m)は、交通路と古墳の立地との関係を示す好例です(図5)。明石海峡をのぞむ丘陵上に位置し、周囲に平地はなく、現在もJR・山陽電鉄、国道など東西を結ぶ重要路線が前方部の下と海の間の狭いところを通っています。木曾川が濃尾平野に流れてゆく入口近くの山頂に築かれた愛知県犬山市東之宮古墳(図6)、広大な長野盆地や千曲川を一望できる高所に位置する長野市森將軍塚古墳(図7)、栃木県的那須地方に所在し、常陸に通じる那珂川に面して築かれた下侍塚・上侍塚古墳(図8)など、要衝に位置する古墳の例は枚挙にいとまがありません。古代以来、水運は重量物を船で運搬する手段として重視されました。また河川は地域のまとまりや地域同士のつながりをみる単位となっており、遺跡や古墳の分布を「〇〇川流域」というまとまりでとらえています。

古代の港である津は、浜堤で囲まれた場所や潟湖など自然の地形を利用して営まれました。本日紹介される京丹後市網野銚子山古墳が位置する丹後地域は、弥生時代から海外の鉄やガラス製品などが流入していたことが確認されます。日本海を通じた交易において、各所に津が設けられていたのでしょう。古墳時代になると瀬戸内海を通じた海外との交易も活発化します。先の五色塚古墳の前を通過し、大阪湾から淀川を遡り、木津川を通じて南山城に至り、そこから大和へと通ずるルートは、王権に関わる交通路の大動脈であり、その流域には多数の古墳が築かれました。

古墳の立地に関して、交通路と並んで近年注目されているのは、地域の土地開発との関係です。耕地を切り開き、水路を整備するには多くの労働力と技術とが必要です。それらを指揮し、開発に成功した支配者のために「記念碑」的な墓を造営したと解釈するものです。

群馬県高崎市、榛名山の東南麓には5世紀後葉から6世紀初頭の三代の首長墓である



図5 神戸市五色塚古墳の立地 大手前大学支学研究所資料写真



図6 愛知県犬山市東之宮古墳の立地 犬山市教育委員会2014『史跡 東ノ宮古墳』



前方部からみた墳丘 後円部の向こうに
長野盆地・千曲川



麓から見上げた森将軍塚古墳

図7 森将軍塚古墳

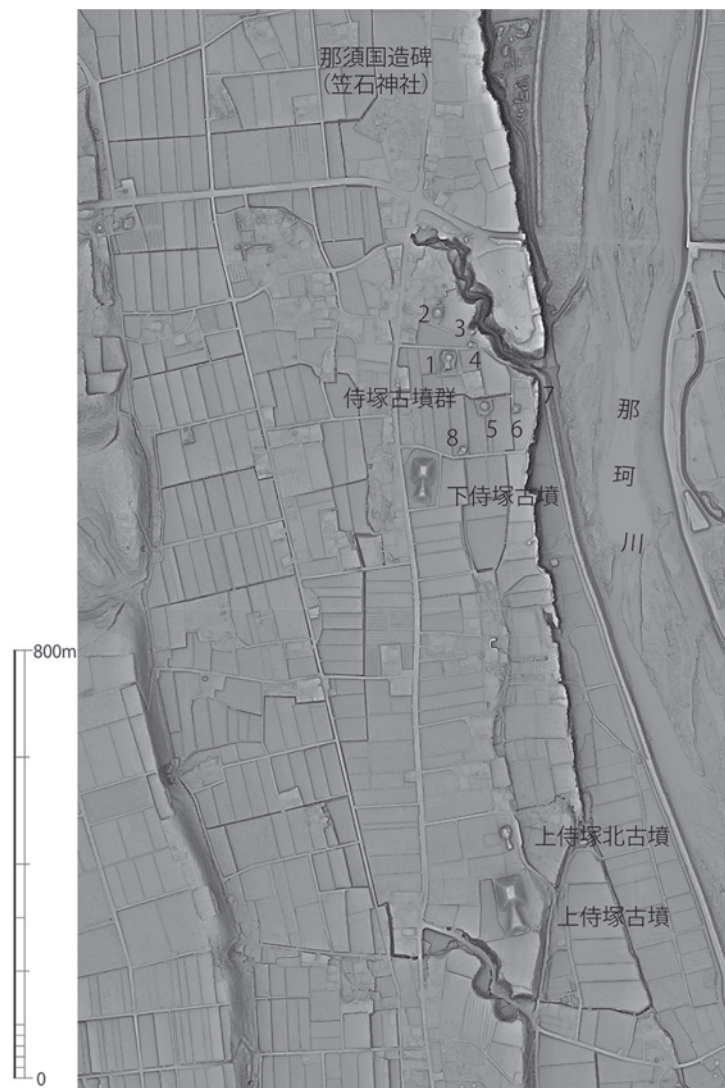


図8 栃木県大田原市下侍塚古墳・上侍塚古墳の立地
財団法人栃木県埋蔵文化財センター現説資料

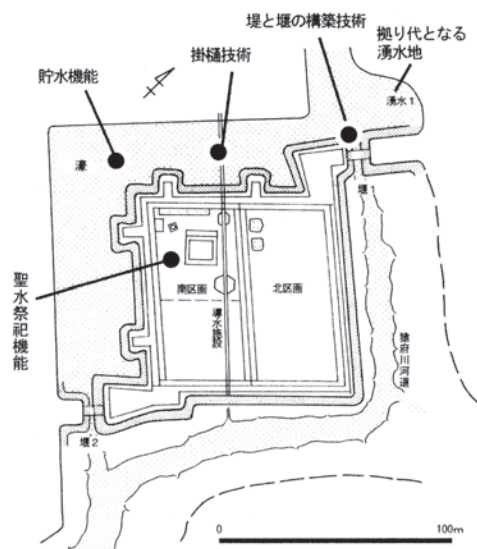
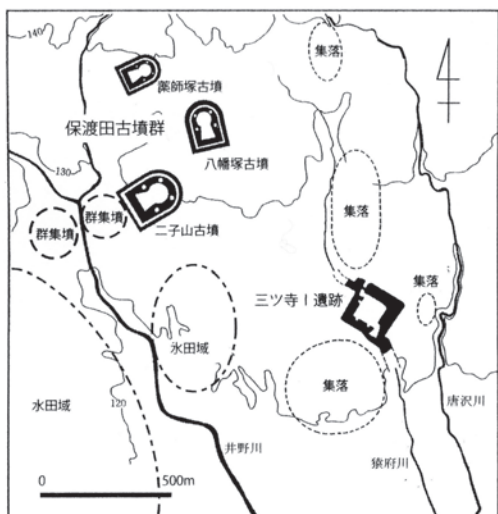


図9 群馬県高崎市保渡田古墳群と豪族居館の三ツ寺Ⅰ遺跡 若狭徹2017『前方後円墳東国社会』
吉川弘文館

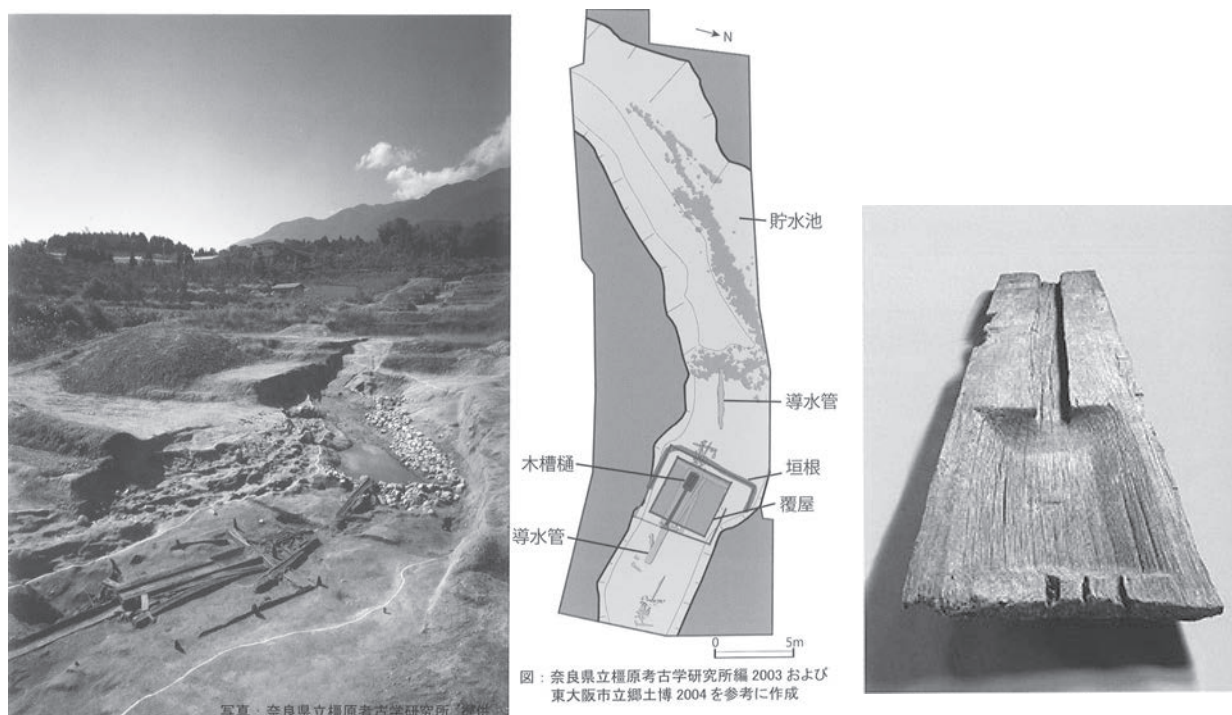


図10 奈良県御所市南郷大東遺跡の導水施設 橿原考古学研究所附属博物館2023『カミによる水のまつり』と杵築市教育委員会2017『水の願い 神への祈り～御塔山古墳とその時代』より引用

保渡田^{ほとだ}古墳群があり、豊富な人物・動物埴輪の配列などで知られています。その南東約1kmのところに豪族居館として三ツ寺Ⅰ遺跡があり、三代の首長の政治拠点でした。この居館は湧水地に接しており、その濠は貯水機能も果たしていました(図9)。また、この地域一帯で集落の数が増え、多様な灌漑施設も確認されていることから、開発目的地に集団を結集した首長の墓・居館と考えられています(若狭2017)。

こうした首長と「水」の管理との関わりで注目されているのは、導水施設と呼ばれる、浄水を得るための設備です。巨大な木材を削り貫いて作られた樋など、貯水部から順々に水を流し、上澄みの水を取るための精巧な仕掛けが設けられています。奈良県御所市南郷大東遺跡で確認された導水施設は、葛城氏の本拠地とされる南郷遺跡群の一角に設けられています(橿原考古学研究所附属博物館2003)。こうした浄水を得て祭祀などに用いることが、各地の首長の重要な役割であったと考えられます(図10)。本日紹介の亀岡市千代川遺跡の導水施設と^{はいだ}拝田14号墳も、こうした関係を考えさせる好例であります。

古墳時代中期の大型古墳では、この導水施設をかたどった埴輪が古墳のくびれ部に設置されました(図11)。くびれ部の谷を水路に見立て、その中央に置かれたものです。墓に導水施設形の埴輪を置くことの具体的な意味については議論が分かれています、祭祀用であれ、水をコントロールすることが首長の役割として期待されたものと考えられます(坂2024)。

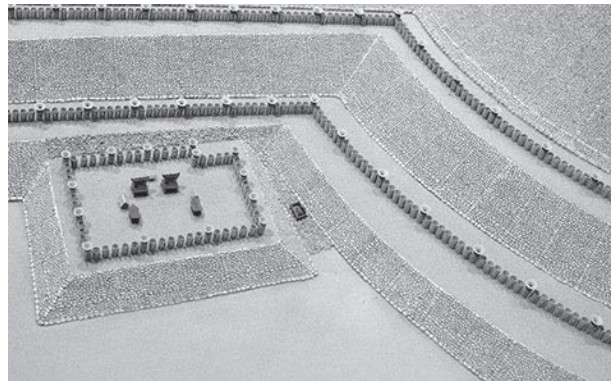
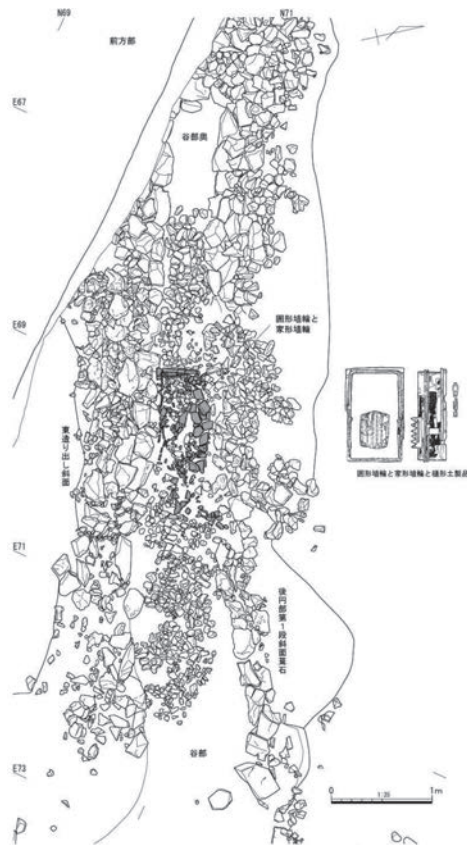


図11 兵庫県加古川市行者塚古墳東くびれ部の導水施設形埴輪 大手前大学史学研究所・加古川市教育委員会2024『加古川市西条古墳群 行者塚古墳』から引用・改変

4. 南山城地域の古墳の展開

以上のような視点から、南山城の古墳や遺跡に関する調査成果をみてみましょう(図12)。南山城は中央を木津川が通り、男山丘陵を迂回して淀川と接続しています。また低平な平城山丘陵を経て、王権の中心地である大和と接する地でもあります。

木津川市椿井大塚山古墳はこの地を代表する大型前方後円墳(175m)です。大量の三角縁神獣鏡の出土で知られ、前期前半に位置付けられます。調査当初から、ヤマト王権と木津川の水運を結びつける役割を果たした人物の墓と目されてきました。後円部頂からは木津川の流れを一望することができます。

城陽市下水主遺跡は木津川の沿岸地域に位置します。弥生時代中期に流路脇に大規模な護岸施設が設けられ、また古墳時代初頭にはその流路を再掘削して幅10m以上の水路が造られています。川津など水運に関連する施設と考えられています(筒井・高野ほか2018)。河川の実際の利用を示す遺跡の調査例として貴重です。

京都盆地南部にはかつて巨椋池という大きな池が存在し、東から宇治川がそそぎ、西では木津川と桂川の合流点につながっていました。この南側で調査された久御山町の市田

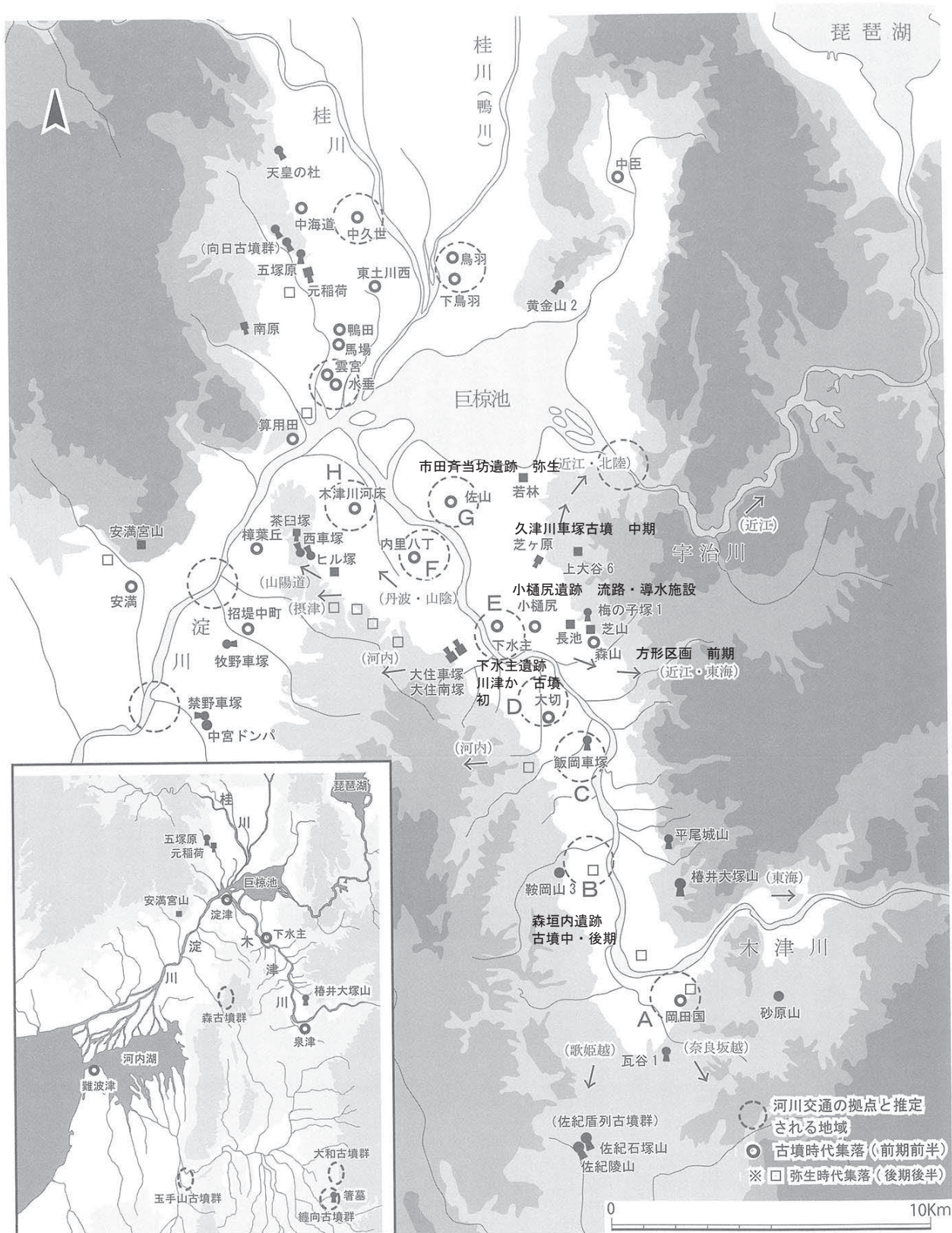


図12 南山城地域の弥生後期～古墳時代前半の集落と古墳 高野陽子2021『山城地域における椿井大塚山古墳出現前後の集落動態』から引用・改変

齊当坊遺跡や佐山遺跡はそれぞれ弥生時代中期、古墳時代前期に集落のピークを迎えます。こうした低い地域に大規模な集落が営まれていることから、巨椋池や河川を利用した交通の便の発達と共に、低地部の農地の開発がはやくから進んでいたことが想定されます。なお南山城では城陽市芝ヶ原古墳(12号墳)など弥生時代末～古墳時代初頭の時期に、鏡などの副葬品をもった墳墓がいちはやく築かれていることが特徴です。また東海系土器など他地域との交流を示す資料もみつかっています(高野2021a)。東西交流の接点となる地において、人的交流の中で開発が進められ、その指導者となる人物のための墓が築かれたのかもしれません。

そうした集落を基盤として、南山城地域の各地において前期の首長墓系譜が展開します(広瀬・梅本編2021)。とくに前期後半の時期の木津川流域では、木津、鞍岡、飯岡、大住、男山、久津川の各地域で多くの古墳が確認されます。大和からの交通路がより重視されるようになり、その交通路に沿って古墳造りが活発化したものととらえられます。

古墳時代中期になると、久津川車塚古墳に代表される大型前方後円墳が登場し、階層構成型の古墳群が形成されます。久津川車塚古墳は近年の調査によって古墳の詳細な内容が判明しつつあり、造り出しの脇からは導水施設形埴輪も出土しました。

久津川古墳群の南方で最近調査された城陽市小樋尻遺跡では、前期の流路の中に設けられた導水施設が確認されました。この流路は後に人工的に水路として掘削され直しており、土地開発に関連する遺構と考えられます。『日本書紀』仁徳紀や推古紀に記された「栗隈大溝」との関係も注目されています。導水施設がそうした水路との関わりをもつ流路に設置されていたことも興味深い例です。

古墳時代中期の南山城では、久津川古墳群以外の地域での前方後円墳の築造がめだたなくなります。王権の大型古墳築造地が河内や和泉に移動した時期にあたります。木津川のもりがいの管理体制にも変化が生じたものと想定されます。精華町森垣外遺跡では大壁建物や多数の掘立柱建物が確認され、陶質土器・韓式系土器や鉄滓・馬歯などが出土しました(小池ほか1999)。中期～後期に営まれた渡来人との関わりが想定される特殊な集落と想定されます。

後期には宇治二子塚古墳なども存在しますが、さらに前方後円墳の数は減少してゆきます。一方で横穴墓が発達し、有数の横穴地帯となっています。この時期の南山城地域では掘立柱建物が多数となってゆく点も特徴です。王権の強い支配下に組み込まれていったと解釈することもできます。

京都府では各地での調査研究の進展により、地形や自然環境、王権との関わりの中での古墳や遺跡が展開した様子、ひとびとの活動の具体的なありさまが明らかになりつつあります。多様な古墳のあり方と、その背後の社会の変動を研究する上でモデルとなる地域です。

【主要引用・参考文献】

- 大手前大学史学研究所・加古川市教育委員会2024『加古川市西条古墳群 行者塚古墳』墳丘・造り出し篇
- 橿原考古学研究所附属博物館2003『カミによる水のまつり－「導水」の埴輪と王の治水－』
- 杵築市教育委員会2017『水の願い 神への祈り ～御塔山古墳とその時代～』
- 小池 寛・中村周平・野島 永1999「森垣内遺跡第2次」『京都府遺跡調査概報』第86冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高野陽子2021a「外来系土器にみる初期古墳の成立基盤－城陽市芝ヶ原古墳築造の背景－」『京都府埋蔵文化財情報』第139号 （公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高野陽子2021b「山城地域における椿井大塚山古墳出現前後の集落動態」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群』季刊考古学別冊34 雄山閣
- 筒井崇史・高野陽子ほか2018『京都府遺跡調査報告集』第173冊（下水主遺跡第1・4・6次）（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 坂 靖2024「古墳時代の水支配と水の祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第249集
- 広瀬和雄・梅本康広（編）2021『椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』季刊考古学別冊34 雄山閣
- 福島孝行（編）2023『南山城の大型円墳とその時代－金比羅山古墳を中心に－』ふるさとミュージアム山城
- 古川 匠ほか2022『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会
- 若狭 徹2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
- 若林邦彦（編）2017『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館調査報告第14集



第 158 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 7 年 7 月 27 日（日）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<https://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189



FB



X